

悠々の河

29

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

ひみつ

「そ、そうで有ったのか」

彌兵衛の顔色が変わった。

「でもね、お父さまは、おじいさまのことが大好きなのよ。お母さまがおじいさまのことをちよつとでも悪く言つと、お父さまは、すぐ怒るのよ」

彌兵衛は驚きを隠しきれなかった。

そして、いつか五郎太が言っていた言葉を不意に思い浮かべた。

「勘六さまは、ときどき、どこかへ通つておられます。どこへ通つておられるのでしょうか。」

「そうで有ったのか…」

彌兵衛は溜息をついた。

「そなた、つると言つたな。つるにも苦勞をかけ、寂しい思いをさせたのであろうな」

「寂しいことなんてないよ。わたしね。おじいさまに会いたくなつたら、いつもここに走つて来るの」

「ふん、ふん」

彌兵衛は、目頭が熱くなった。

「お父さまはね。わたしを膝の上に乗せて、おじいさまと、ゆうおばさまのことをよく話してくれたの。ゆうおばさまはお星さんになつてしまったのよね。おじいさまをいつも守っているんだよつて、お父さまは言つてたわ」

彌兵衛の鼻の中に熱いものが、ツーンと流れた。彌兵衛は、手ぬぐいで汗を拭うふりをして、鼻をかんだ。



画 寺戸良信

「おじいさま、握り飯を持って来たのは内緒よ。おじいさまは秘密を守るの？つると会つたことも誰にも内緒よ」

つるは小さな手を差し出すと、彌兵衛の輝だらけの汚いゴツゴツした手を握つた。

「約束げんまん。これは、わたしとおじいさまのひ、み、つ」

雨の少ない夏は、稲穂を実らせ、前の年の冷夏の不作を取り戻すように、日吉村の百姓たちは秋風の立つのを待ち兼ねて、早目の収穫に精を出した。

孫娘のつると出会つてからの彌兵衛は、まるで人が変わったように穏やかになった。

道行く人にも彌兵衛の方から声をかけ、農作物の出来具合を聞いたり、その人の家族の安否を尋ねたりした。

「庄屋の旦那さまは、最近人間が丸くなつてこられた」

「顔付きが、すっかり変わつてしまわれた。やさしくなられて、仏さまに近こつなつてこられたのだろうか」

彌兵衛の急な変わりようを村の人たちは、不審に思い戸惑つていた。

幼い子どもを連れてくる老人を見掛けると、彌兵衛は、子どもの歳を尋ねたりして声をかけ話し込むことさえもこのごろでは珍しいことでは無かつた。